
その先に

相良 マミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その先に

【Nコード】

N5294T

【作者名】

相良 マミ

【あらすじ】

とある新月の夜。

その少年は、真っ暗な闇の中を歩いていた。
肩にカラスを乗せて。たった、一人きりで――

それは、とある新月の夜。

色の死んだ真っ暗な闇の中、波の音だけが聞こえてくる。それは穏やかと言うには大きく、荒ぶるというには優しい。

そんな闇の中にあっても、長く居れば目が慣れてくるものだ。次第に、どこまでも続く灰色の砂浜と、そこに隣接する広大な黒い海が横たわっているのが見えてくる。辺りには灯台もなく船もなく、遥か頭上に光る星々だけが控えめに煌いていた。

波が砂の上に寄せては戻り、戻ってはまた寄せる。濡れた砂は波が引いた途端にその水分を吸い、湿り気だけを残す。

その湿った砂と乾いた砂の境目に沿って、足跡が長く長く線を描いていた。ところどころ、打ち寄せる波に消されてしまっているが、それでもずっと辿って行くことができる。

その足跡が向かう方、先頭に、その少年は居た。Tシャツに薄手のパーカー、カーゴパンツ。そしてどこに脱いできたのか、足だけは裸足といういでたち。独り前を向いて黙々と歩いている。

いや、よく見ると独りではない。周囲の闇に混じってわかり難いが、少年のその両肩には、カラスが一羽ずつ止まっていた。

しゃく、しゃく、しゃく、しゃく……

砂を踏みしめる音が、波音に混じり溶けて消えていく。少年は唇を真一文字に結び、終始無言で歩き続けていた。

「おいおい、オマエさ、いったいどこまで行くつもりなんだよ？こんなところに何もありませんよ。オイラが言うんだから間違いないって」

左肩に止まっていたカラスが少年に言った。右肩に止まっていたカ

ラスが首を伸ばして少年の左肩を覗く。

「アタシはそうは思わないわ。アタシたち、もう何度も来てるじゃない、こういうトコロ。その度にいつも何か見つけるでしょ？ それはアナタが一番よく覚えてるはずじゃない」

「って言ってもよお。ホラ、見てみるよ」左肩のカラスが左の翼だけを広げ、周囲を指し示した。「今回ばかりは無理だろ。本当に何もねえじゃん。在るのは、暗くて冷たい海と、砂、砂、砂、砂ばかりか。それと、砕けた貝殻と、流れ着いた海藻と、変な植物に甲殻類ホント、歩きにくいったらありやしねえ」

「あら、歩いているのはアナタじゃないじゃない」

「オイラみたいなもんさ」

「まあ、呆れた」

自分の頭を挟んで繰り広げられる会話を気に留める様子もなく、少年は眉一つ動かさない。無言のまま、歩き続けている。

星たちが、少しずつ、ゆっくりと、でも確実に、背中の方へと移動していく。

闇の中に聞こえてくるのは、波音と少年の砂を踏みしめる音だけ。ただただ時間だけが過ぎて行く。

それでも少年の脚は止まらない。もはや、どこから歩き始めたのか、いつから歩いているのかわからなくなっていた。

いつの間にか空が白み始めていた。潮も満ち始め、海と陸との境界線が少年に近づいてきている。ついに、その波の先が少年の足を捕らえた。パンツの裾が、足と一緒に濡れた。

少年は顔をしかめ、立ち止まった。

「なあ、オマエさ、何を探してるのか知らねえけど、闇雲に探してもいいコトないぜ？ もっと、こう、当たりとかつけられねえの？」

「そんな言い方しないの。アタシたちなりに想像すればいいでしょ？ アナタは過去に見つけてきた物を覚えてるんだし」

「論理的に考えてみるよ。そんなの無理だっつーの。だいたいさ、コイツ自身、今自分が何を探してるのか、本当にわかってんのかね？ オマエの方が、感覚的にわかってるんじゃないの？」

「……わかっているのかもしれない。わかっていないのかもしれない。でももし『それ』を見たら、絶対にこれだってわかるはずよ。アナタも彼もね。今までだってそうだったでしょ？」

「説得力のねえ経験法則だな、オイ……」

二羽のやりとりが聞こえているはずなのに、少年はやはり無言のまま。険しい表情で腰だけを前に折ると、これ以上濡れないようにとワークパンツの裾を膝の上まで捲り上げた。そして身体を起こし、一つ小さく嘆息した後に再び唇を一文字に結ぶと、また歩き始めた。

しかし、それから数歩も行かないうちに、少年は脚を止めた。

カラスたちが不思議に思い、少年の顔を見る。少年は、小さく口を開き、瞳を見開いて真正面を見つめていた。カラスたちも、その少年の視線を追う。

——遠く、遠く、遥か遠く——水平と地平の溶け合う線の上に、一点の白く強い光が生まれた。

彼らがそれを認識した刹那、その光の粒が、その小ささからは信じがたいほどに強い力を発する。瞬く間に光がその線の上を走り、わずかに湾曲した空との境界線を黒く浮かび上がらせて行く。

両脇でカラスたちが翼で顔を覆う中、少年は優しく瞳を閉じ、その光を全身に浴びる。瞼に、白く、赤く、強い光が焼きつくのを感じた。

それが落ち着くのを待って、少年がゆっくりと瞳を開く。

あまりの眩しさに、一瞬目の前が真っ白になる。そして、少しずつ戻ってきた視界に映ったのは、五色に彩られた世界……。

「……見つけた」

右の肩でカラスが呟いた。

「フン、明けない夜はないってか」

「そういうことね。でも見てよ。本当に綺麗」

どこまでも高く澄んだ空は、地平から頭上にかけて白から青への見事なグラデーションを見せ、少年の足を濡らす海は、今や温かい淡碧色となりきらきらと光っている。浅瀬には魚まで泳いでいるのが見える。穏やかに寄せる波は白い泡に縁取られ、それを受ける砂浜は黄金色に輝く。

そして、それらをもたらした丸く大きな光は、既に地平を離れ、直視できないほど明るく、優しく、すべてを照らしていた。

少年は微笑みを浮かべ、一つ大きく伸びをする。そして、再び歩き始めた。

次の何かを探しに。

(後書き)

ここまでお読みくださいましてありがとうございます。

もしよろしければ、感想などいただけるととっても嬉しく
思います。

もちろん「読んだよ」のご報告だけでも嬉しいです♪

＊ ＊ ＊

無言ダンテ様が主催された『創作五枚会』に便乗参加した作品です。

テーマ／光景

禁則事項／直喩および固有名詞の使用禁止

(初出…2011／02／19)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5294t/>

その先に

2011年6月6日15時40分発行